





待 13
 1833
 9

繪本左圖記第九之卷

目錄

六角承禎謀害覺慶

義昭公吳濃國勅座

明智光秀素性

明智光秀見殺

繪本左圖記

於市方嫁淺井長政

信長共長政會佐和山

本下卷吉郎救危急

明智光秀 謁信長卿

とどのへんぐんよりとやう
小田大軍討三好

そくきょう ぐふやまのころをぬく
後吉郎 援和岡山城

繪本古圖記卷之九

ろくろしやうとくけんとくせんとうろ
六角義禎謀害覺慶

じく^{これ}乃^{こゝろ}益^{えき}益^{えき}の山を歩^{ある}けりやう天^{あま}が下^{した}にか^かくは家^かもは
 是^{これ}た^たん後^ご醍^{たい}醐^ご天皇^{てんわう}益^{えき}益^{えき}の城^{しろ}御^ご落^{らく}の^とれ梢^{こしらへ}を拂^{はら}ふ松^{まつ}の風^{かぜ}
 を雨^{あめ}の落^{おち}そとま^まし^し木^きの蔭^{かげ}よ立^{たち}寄^よせ給^{たま}ひ^ひされ^らば^ば下^{した}落^{らく}乃^な
 ち^ちら^らく^くと御^ご神^{かみ}よう^{よう}里^{さと}々^々御^ご読^{よみ}せ^せも^もと^と詠^{よみ}せ給^{たま}ふ御^ご
 歌^{うた}なり^{なり}時^{とき}の石^{いし}肖^{せう}よ^よい^いせ給^{たま}ふ^ふ一^{ひと}天^{てん}の君^{きみ}れ御^ご歌^{うた}よ^よ天^{あま}が下^{した}
 に^にも^も隠^{かく}家^がの^のは^はと^と歌^{うた}せ給^{たま}ふ^ふ恐^{おそ}き^きま^まり^りも^も勿^な律^{りつ}は^は昔^{むかし}
 た^たと^とい^いも^もの^のぞ^ぞは^はと^とれ^れは^は足^あ利^りの^の軍^{ぐん}さ^さ氏^{うぢ}云^いは^は嫡^{てき}と^となる^{なる}
 義^ぎ輝^き云^いは^は運^{うん}臣^{しん}の^の為^{ため}と^と弑^しせ^せれ^れ給^{たま}ひ^ひ御^ご舍^や外^{がひ}一^{ひと}宗^{そう}院^{いん}門^{もん}主^{しゅ}是^{こゝろ}
 夢^{ゆめ}君^{きみ}の^の幸^{しあわせ}し^して^て南^{なん}都^とを^を落^{おち}せ^せ給^{たま}ふ^ふも^も斗^と々^々人^{ひと}心^{こころ}た^たれ^れ

六角義頼
光景を案
せんと謀る



今ぞ彼帝の御制を思ふありせられ御後を継らせ給ふぞ
理りるる義とありされども細川義高が女抱うては死ね
侍守が館はあびしむせ給ひて密に善代恩顧の武士
を召しよば張集るる今より大銀三圓仁本武田一色河田
二階重牧源飯川上野の西へ御味方とあるとくも其昔は
吾大身名家ありくとも此附はあていなき活微勢の武士
のちうしに怨敵殊代の斗兼調ひくく武田義澄と頼
給ひ若狭國は頼と給ふ此もか内様く大義を愛死と
き地理よりいふとて再びは忍みゆり給ひ六角義秀は義
復入道は足利家再真の依を渡せられ多きは義秀思ひ
て合義親音寺の城は運なり深く旁に跡なき仕

なり六君も皆く安堵し給ひようく義兵の斗をわづ
し給ふとくも義秀多病とて國政は持らばと権勢悉
叔父義復も女裏ありて未ゆ成親せど此時京都三好
の三老居る茶の南郊を落させ給ひ其左不を知られ
を憂煩心を安む松永が先見のおとく諸侯をかきいし
洛せ此上の恥辱いけしと石山の上人(中)より折紙
の旨は遠いぬとておのよに代て國へ回者を入る
茶の左不が秘密は多しとんと計るかに忍従し本
家六角義秀が館におまひより怪はせられ義秀は
茶を掛け上洛せし勇く安難候なりとと執政義復入道
へさよぐ音物金帛を送り茶を討て我いふ力と合

義昭公
足利の
國執
三禮



義昭公
足利の
國執
三禮

せむきあつて天下は官領しむとて送りけりば
兼復入道忽惡心を發し三好の組に足利を殺さんと欲
しとも原形義秀此の事を察し足利守護しなむは
兼復入道殺てを勅とり不能後こそはに日月交
の疾といふやうとや又く其れ去りて仲秋の夜中るに
む月を源して宴をなさんと兼復が居城箕代足利を
を法拓と義秀不意の禍あるのを恐じ自衛を助け
足利を守護し其れに怒り兼復其子義弼諸共
郷食應應對町亭を居し頗る境に入らう原形義秀今日
の宴會必謀計あはしと心を付く何なる妻戸の蔭に力者
を伏せりとて刃へく鎗刀の光池水に映し輝くときり

きりば密に席を立て和田守を此の事を告ぐ候
守足利の御前には門と居あて盡て令せし御衣服
只今持来ある御石智花とて中て吃とめくをせまう
これに足利其心を悟り諸を立給へ候守は
耳には瓜付兼復が計を云上し一擲の機を破へるを
守護して居りたる計は三測大和守細川義春も我
秀兼復が前に出るも足利率に腹痛甚しく宴席に
連りがて親善寺の城へ入り以居るは令し此節とて
む親善寺の系會多罪を附とて謹で述べし兼
復心中大に驚きひそかに息男義弼を令し足利の
跡を追しむ義弼三百人の選兵を引率し湖水の邊

（馳）終つる迄は、此の真會既と破と義秀乃三
河細川も親音寺の城へ歸りたり

義昭と足濃國勳座

叔父和国伊賀守と受茶を誘ひ、あせ搦まふ。あび
出、徳義を誘ふ。湖水の邊りへ出され、仲秋の月さくさく
登り、金波江上は濃濃う。後里の舟もぐるりと遙く江上
を見渡せども、釣る海士の無より外は、一糸のふもは
いづいせんと、和國を、以後の方より人馬の音、喧しく松明
を照し、義昭が勢、追付より伊賀守、今いそいで、あがり、款
追付は討死せんと、君成、困て立ち、あに傍ちる入江の中
より、小舟一艘漕出し、武者一人、脱れ、出、妻を揚て、和国、反

つて、いり、びやと同、伊賀守、たえ、は、誰人、あつや、彼、中
の武士、和國、これをは、六角、義秀、君の急難と、救ひを
らん、お、来、命令して、い、後、一、ち、ん、と、い、ま、あ、ひ、く、え
茶、後、大、は、び、急、よ、舟、乗、移、一、丁、斗、漕、出、せ、追、入、の
軍、勢、の、邊、り、へ、馳、付、そ、こ、よ、ま、よ、と、机、も、小、船、よ、ま、あ、て
い、を、渡、り、ん、と、思、ひ、儲、ぬ、か、れ、は、湖、よ、い、心、も、ほ、く、ど
あ、な、つ、て、い、は、易、知、え、茶、い、虎、口、を、の、が、も、曉、は、橋、本、台
と、い、ふ、不、よ、易、知、い、民、部、少、輔、經、深、が、え、は、暫、く、隠、ま、せ
一、が、ま、り、て、細、川、三、河、が、安、集、會、一、永、祿、十、年、就、是、就
き、終、い、困、る、朝、倉、た、い、を、浦、義、系、う、館、入、給、い、れ、は、義
系、大、に、候、び、軍、勢、を、集、め、上、洛、と、き、は、し、御、意、や、い、より



明智光
秀
と
生



是等もとゞく安堵し給ひては十一年日月遷徙は
 御諱を義昭云と申す此所義兵を揚て三好松永
 公家を付代あり度有度く義系へ僅是ましくされども元
 来義系勇るる思おかれは兎角は事と果てんは
 日幼稚の児を失ひ熱傷は地を忘ま上洛の心交になり
 くれは義昭云も竊に執前を出て此の國へ移るべしとより
 其用を所償し給ふ爰は本下居吉岡者を入此執
 きを安んずるに信長は委く言上し朝倉義系柔弱
 少く義昭云此國は勅座まうまさんと斗給ふは天我
 君に助て事を成就にじむる時之又く義昭云を此國へ
 へ給ひ義兵を教へ上洛し給ふまでの本懐の時且達し

内守菅谷九左の等三子余誘す途よ出て還へり其後西
 の庄立政寺を御平陳と定め警固の武士二万余人置て
 忠臣いさゝか殿に守護しなり信長系よりて御目見
 首尾より個ひ見目軍勢僅一懸敵殊代致と云はし
 謹て言上し及ひしに義昭其忠懐よりく足利再興の
 儀偏信長が誠忠より宣告れと思はしよし上云ふに
 信長儀で飲掌し我家の面目何よりそよまんと蓋る敬
 ちよりる元来義昭に織田家へ勅使しせらば強きを
 倉家親系のお士明智十左衛門光秀が勧めたりしに光秀
 は其先清和の末流よりく其後の國主は藤原の一族明智
 の城主土岐光経が子之幼少よりて又よゆれ故に義昭が

おは流石を追放せしむ者後約と志し普く六十余州と
 徘徊し主と撰んと仕んとし周防の山にありて毛利元就
 の居掛能登守よりきて毛利家の臣よりんのを乞能登守
 光秀が智無容貌衆を誂よりふめで義昭は仲ひ元就を
 を吹捧し元就光秀を以て教日其度そは様よりん小
 才智明敏よりく勇余あり元就の聰明廉利よりて
 人の心根をえらるる常と指がむに光秀が相貌狼の眠る小
 細より其怒の背よりく起り其心作るは静たりと不謂外
 寛よりて内急なる故以て元就後患と恐むる金銀と多
 く与光秀を困めむと光秀又も樂まむ心不仕へといふ
 と云ふやうに別の小は交拜して義昭を出て其後

東鑑記 四十一

明智光秀
叔母と祝



東鑑記 四十二



より薩摩へ叛じし此國の用心よりきびく他國の者擧
に往來を許さど止るるに國へより紀元後勢路を経て
賊軍より皆く安んじりたり

明智光秀見殺す

此時永福元年の秋なりたるが加賀國一向宗門の徒一揆と配
賊軍攻入しは船倉を仇守系に殺すの軍兵を以て是と防
ぐ明智光秀賊軍の長崎とす不又後居しるは困を得て
一揆の戦ひを以んとし津幸家の軍場より入りしるふ又書きて
戦ひ止まはし無を焼て討伐と光秀遙に津幸家の東と見
るふ一道の赤坂を以たりしと船倉の陳宮に犯し是一揆の
後後討をうけ表すこととんくされば無縁なりとも仇守

ふかくとあるふ船倉勢よりものりんを以て用心堅固に
敵を以て一揆の心と光秀が言はるる其の戦斗は後討しけ
しと通て利を密にせんばさんぐは教し十々の勝利と
得たり安んじゆと仇守光秀がたふらるる威心し義
系は教め仕へし光秀も皆く安んじりて義系が
容許を以るふ系弱の小人うて供ふ事と計るる義系を
よけに然るは足利義昭に賊軍より入らせ給ひ義系に計
て三好松永を誅伐せんと義系は義系愚うしる
事を果さば光秀密に義昭に謂て曰義系弱乃
忍びたり足利再興の仁は中と善く天下の英雄と考
るふ尾見小田信長よりくるは君よく彼を以て勅度し

信長は余一て怨敵を更治し終るべしと勅せし
義昭も遂て信長を頼み安んじたり然るに先ず
勅せしよりて一向信長と慕ひ終ひたり信長は後者を
て待てしより急用を以て入るに及ばず

於市三方城は長政

信長卿是利義昭を守護し不日又却て攻めし
の志を遂んと其の起るまじく之を安んじし
義昭は長政を大敵冠種是公の後流ししては
家の内トトて又久政と共に小の武威を輝し
信長の良おかり信長上洛の志をたたりたる
名と和順せしべし上洛の志は難くはたし
を以て長政は長政嫁しし内縁を結ひ力を合せし上洛せ

んと不破河内守を使者とて長政を縁渡の儀に
及びたり長政の老臣安部三郎は遠近を去る
まじく是れよりかりたりとも終つ小田の乞はれ
縁の返答ありて永禄十一年に月吉辰を撰り於市
を以て長政は嫁し於市の方此時秋二十二日
と物なると揚柳の風はなびくまじく秋の意は
る美草の露はつむしつむしつと東國を双の
して和歌は巧みなる女に長政は長政は
なく指老の髪は細かり安んじし織田は
秋を唱へる歳を咄けしは大業を記しとて

於市の方
浅井長政
嫁と



國より八月十日信長と長政とに及佐和山にお
いへ始て對面を遂んとてあはれは又用意をなすと小田
家老長政に謀りて曰法長政新に由家に因縁とて
心を計るに及佐和山に他國へ入るに遠慮ありきり
と申すふ小田長政とてお君長政と縁と結び對面
かくて親しくしに及佐和山の宿見たりしが武藏武
を携へて更和の威をふるて法長一家を攻伏せしめ
あつたは不肖とて不も君孤守護しなりには及佐
は又又危きなりとてやとれ信長其後にはせ
られ供人幾と百又十人悉く平夜と着せしめ近
小田長政唯まて人太勇不敵の信長御智係不恩儀乃

小田法長調佐和山

永禄十一年八月二十日に及佐和山に及ひし小田信長
法長政始て宿見ありは又懇切心を演顯和順を
結びたる法長の功に遠慮をなすの智急人誠へ勇武
秀なり別士ありは及佐和山に及ひし信長が言
を考へしふ及佐和山とて平夜と着せしめ遠慮
と計る久政其不敵を思ひて及佐和山に遠慮を
遠慮事の果ざるは及佐和山に及ひし信長を捨
て已が不意に及佐和山に及ひし信長を討てし
心を定め及佐和山



信長長政と
佐和山
會ひ

真跡記初編九

十五

ふたなりたる信長用心の毒多きならん。お解て笑談
入奥の侍なりけれ遠慮おはしつとて今小田原安堵
て見事なれども後某めをきて御酒をさうんと耽る
をえて信長のめんとて後者信忠とかい進ぐ曰是下の姓名
いふん遠慮なき言て曰小居いそ遠慮ある春元と
いふ下美めて曰め人の小姓女子の勤る役之足下のそ浅井
の老后何ぞ目的をなさ給ふ及ん席より着て兎女よ余に
給へとい遠慮い信長近付き一刀殺害せんと計しに
後者よん然められ首尾けりと思ひされが微笑して言て
曰希々貴族の光徳餐應なきのを恐る妻て某めめ
集りて一肘の奥を添えんとて後者の曰是下の勇猛の
兵助人の似や中へ小居めをきては看も様弄一曲笑談に
どしと鈍子をきて信長進め扇をひくきまわがり兵の
交り戦ふ中の酒宴ふると衆うまでくれ一座ちの奥へ
どうく笑ひて遠慮が計むはしくあり信長卿やぐて眼
を告げ顔皺てこそあへ給ふ

本下反古救危急

信長卿其疾そのよ甚は苦く挽ひ院ゐんとて寺院いんを本陣ほんじんとて宿やどり給たまひ
 何なんの用心ようしんもななく候こうく酒宴しゅえんを催もよほしし体息たいそくせししるるる下くだ
 及およぶぶも仲なかつみみなく今日けふ佐和山さわやまに遠とほるるいい暎や
 るる背せも眠ねららぬ御側ごそばに附つ添そ守し護ごししるる遠とほるるいい暎や
 馳は走そう叙しよ人にんの令めいせしし此こ善ぜん挽ひ院ゐんより始終しじう信長のうの尋たづねねと何なん



木下重吉
危急を
救ふ人



いさふまゝ用心の待もなく抑へられど側より猛寇者お
 下居右に方々眼を配りて獲へられ振るゝを働と
 不能密よ小谷の城に馳参再々政長政よ信長を誅とべき
 能頻よやとむれども長政父を放て涕せに遠居今も
 まさきやうなく不佞軍兵を率一菩提院へ押寄信長と
 討たる人父子の怒りを受け切腹とるも國家のおちを
 厭ふやうと心を定め浅井掃部と申合せ又百人の遣兵
 を引率一菩提院へと急ぎ参る此時遠居の遠居が席より
 ぞれを怪しむた右の人易るゝ先越遠居只一人ありて
 く馬よお糸何変もななく出参さうとふ後右極る奇
 怪のふへ体へかくん危うととて通てお配やとるあん

狼烟を揚ぐお國をなせば招針柏原の在るゝ埋伏する
 本下勢小六兄弟が福田堀尾加次田がまゝ余騎將時乃
 内よ集りて菩提院の四方を望め用心きびしく守り
 遠居浅井くれ防衛の体ありとい思ひもようは操又操
 と馳参りたる先々の士率馳入りて何れの勢も知れど
 二子余り寺の四方を望め固め嚴重に守護するはは
 参りたる遠居自菩提院より伺ひ参る小織田乃兵士
 きり早れどと並居たる遠居其勢きり思ふに
 良ぬを我といふふと討参る叶たれや終るに我國織田
 のおよこふと歎息して退き参る

明智光秀謂信長



叔信長郷へ本下が防禦うて急なく攻國はしくと洛の
月玄頻なりと玄復又明智十々清光秀頼前を退法本下
辰吉郎又きて織田ははんを需む辰吉對面して光秀
を考ふふ度重衆を秀一英雄なりとも殺す面は取れ
反逆の相貌はれは後患と恐と危やせはし角やうとせどと思
急しるしも無く光秀がうは是利義昭を織田進め勅
座はなり純中義昭云の吹拳を以て信長も光秀とそん
ゆを移ふ時之れ止むたう言ふに及ひるふ信長急ぎ
光秀と石出其肯柄易常たうに秀頼る威風あるは
収む今度の上洛三奴誅伐の先も加ふる一と其意を
置しりるは光秀思ふ附して飲ひたり叔も永禄十一

年秋九月信長と洛の如陣ありて先は六角義禎は
方より来るはれを征伐ありてある京都攻めと
定めはるは尾張三河伊勢の軍兵を都てに八万余
騎旌旗一天と度は槍刀雲を突と人衆は馬強く怒く
と徳を祝と先陣脱はし別平尾はるは後陣はあ
徳川家康赤坂を交へう此時佐々木六角入道義禎は苗
たの佐義禎三奴松永は組はるは小田勢を防んと其
るは親音寺の本城は捕籠和田山箕作の要害は此
藤三本城と鼎の三足ははし相助けて長蛇の勢は
んと吉田は雲守は三万余騎和田は守らせ山中山城
守は三万余騎箕作は捕籠其は外月波の城は蒲生下野

守八百餘騎其山の城より種村大藏を捕る余騎水口乃
城に遠る城守より百人石部の城に修を出せしむ
余騎其津の城より馬淵治部を捕る七百餘騎長光寺の城より
上坂兵庫より余騎其外佐山望田大講の城より都て十八
ヶ各要害より櫓籠防禦の使人嚴重なりこれより大軍
を以て攻めりも容易き定長」といふをきり

信長大軍討三好

叔も信長卿に依り本防禦の使より城を脱し諸將と
これ軍の陣定ありしより本下を退き進み出て和山箕
他の城に依り本家の咽喉よりて戦ふと云ふ此両城
陥るむに及ばざるを常を指さるる此山田佐久間等

を拒んで和山箕他も被城より親音寺に根城なり
根を切ぎて枝を抜くんより退き出たり先本城を
落しるる其余の城より攻めて落し信長心中未
だ以て先光秀を以て計を尋ねし先光秀は其
軍の便宜は城に依りて居るふ此時言ふと致す
新来の其旧臣の便宜を失論と云き謂ふなり
御易の上より退きし不忠之此度の合戦本下及の
甚なるなり其城に親音寺へ向ひ攻めり和山箕
の城より首尾相討進退を自由せりと構へりし
たれはた人押への勢を以て防ぎ給ふも本城の合戦なり
いふはし和山箕他を討給ふ時親音寺の



信長
三好
討



城より助勢出て出るものあるはくは是れ大おの本城あり
又頼りに出て戦ふ及ぶれば後者の計城に及ぶる治
と云ふ要論あり其甚感心に云ふを多く和山箕作を
責りて頼りたる肝要ありと詳言よりこれに衆依る
一変して明頼頼の攻るべきと其用意とまぐりあり

本下後者援和山城

時よ本下後者即和山箕作本城も明子刻より攻勢
卯の刻より三府が同は責援をせり言ふに及ぶれば
明智光秀謹でやと云ふ其君の御意を成て先中
られ今度合せの合戦は勅巧なきもに情くくは両城を
本下と某あ人は令せられ攻戦を降し給ふは三府と

限り攻落しやべと頼みければ信長其旨は但せられ和
田山と後者即箕作の光秀各三府を限り攻落と
べと信長されあ人長り座を立ち用意成ると光秀
も新系あられば其勢もこれなきは信長卿より又
あ人をよめ給ひ就中柴田佐久間のあはれと後者才略
勝るを侮れければ新系の光秀より力を添へるが
勢ありをくじき後に出るやうに計りんと柴田佐久
間のあ人も光秀の加勢あり箕作へ強きと云ふ
後者即和山へ向ひ加次田隼人頼田大炊重山新七
小次長は中々忍河に之助源尾助七人を大おと
助武士のあはれ百人和山城の陥阻をほし城の陥る

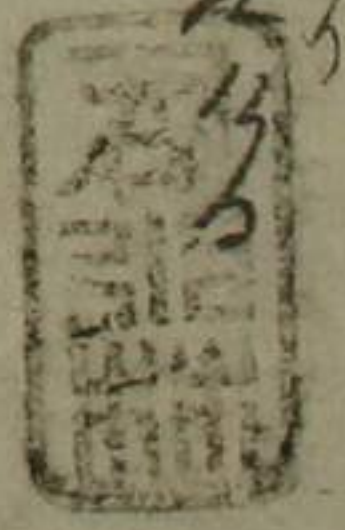
一、計を以て其の勢三万余騎の刻より大なる
 方へ攻めし國を破る。其の勢を放ち、後、其の勢を
 たり。而も、其の勢を放ち、後、其の勢を
 戦の勢を以て其の勢三万余騎の刻より大なる
 吾で、其の勢を放ち、後、其の勢を
 一、計を以て其の勢三万余騎の刻より大なる
 方へ攻めし國を破る。其の勢を放ち、後、其の勢を
 たり。而も、其の勢を放ち、後、其の勢を
 戦の勢を以て其の勢三万余騎の刻より大なる
 吾で、其の勢を放ち、後、其の勢を

又火焼出城中鼎の漏るごとく大石の寄るをうんで一時
に岡を焼くごとくと噴て盡る城中前後の敵は途と失
ひ盡て使へ防戦の用も後には捨るも二の丸にして迎
へる本下か大石掘り両勢一度は城中へ入る入るを幸
切て上る所こそは今日二の丸にもこらへて見ゆなり
是古城を山中に城守へ使者を差紙初害所送て降
参進められ山城も其下知は降ひ自降して降人又出
ぬといふ本下即時は城中とて向う岡を揚て簾より
陳へこそ語り多し此時未辰の上刻に耐余り又和回山の城
落るるに信長其功を称し降ふ此時明智十兵衛
先鋒は其他の城へ押寄岡を焼つて攻めしに城代若田



真景言不希大

出雲守鉄炮矢石を放ちてきびしく防ぎ戦ひ明智が
 物進よりより久しう家に物取建部源八郎に及ぶの
 勇力なりが又百余人城戸を用ひて討て出さんぐみ
 突えられ明智方の兵士傷り負て引退く城主吉田出雲
 守待と唱へて軍をまどめ徐くと引えり



繪本左圖記卷之九終

